

# 親しい関係の雑談における〈配慮〉の研究

——日本語日常会話コーパスを資料として——

齋藤 由貴

SAITO Yuki

神戸学院大学人間文化学研究所  
地域文化論専攻

**要旨** 本論文は、親しい関係の雑談における〈配慮〉の現れ方を考察したものである。その結果、親しい関係の雑談の中にも多くの場面で〈配慮〉が現れ、人間関係の維持の機能を果たしていることが明らかになった。

本論文の〈配慮〉は、会話の参加者に対して友好的な態度を示すことで参加者に楽しく会話ができていると感じさせようとする、会話の参加者に踏み込みすぎないようにすることなどで会話をスムーズに進めようとするの両方である。〈配慮〉が「話題」「話者交替」「相づち」「相づち的表現」の4つの言語表現、「笑い」「視線」の2つの非言語行動にどのように現れているのかを調査し、考察した。調査資料として日本語日常会話コーパスから文字化資料だけでなく映像資料も使用し、イントネーションなどの音声情報、会話参加者の動きや視線などの非言語行動、会話の雰囲気なども考慮しながら研究を進めた。現れた〈配慮〉は言語表現、非言語行動とその組み合わせと多岐に渡る。従来、配慮表現の研究対象として注目されてこなかった題材を対象にした研究を進めることは、談話分析や日本語教育、国語教育への応用のためにも有益であると考えられる。

**キーワード** 親しい関係の雑談、配慮、話者交替、相づち的表現、非言語行動

---

## 第1章 研究の目的

会話は、聞き手と話し手によって作られる。自然な流れで、互いが気持ちよく、また楽しく進んでいると感じられる会話は、参加者が協力することで作り出されると考えられる。本論文は、親しい関係の雑談において、参加者同士の〈配慮〉が、どのように現れているのかを明らかにするものである。

従来、敬体や謝罪表現などの配慮表現については、硬い形式の会話や参加者同士が初対面、もしくは立場に差がある関係を題材として研究が進められてきた。しかし本論文は親しい関係の雑談を対象とする点に特徴がある。また、従来の研究で配慮表現と呼ばれてきたもの以外の〈配慮〉もなるべく広く取り上げる。言語表現として「話題」「話者交替」「相づち」「相づち的表現」の4つ、非言語行動として「笑い」「視線」の2つに焦点を当てる。なお、本論文では、〈配慮〉が意図的なものか否かは問わない。

## 第2章 先行研究の検討

Brown & Yule (1983) は言語の機能として、“Transactional function” と “Interactional function” の2つを挙げている。尾崎 (1996) が指摘するように、本論文で対象とする「雑談」には “Interactional function” の機能が強く現れると考えられる。筒井 (2012) は “Interactional function” を「人間関係を構築し維持することに主眼が置かれるような言語運用」(p.6) と訳している。

尾崎 (1996) と筒井 (2012) に従うと、雑談は「人間関係を構築し維持することに主眼が置かれるような言語運用」が現れやすい会話である。その中でも、本論文の対象である「親しい関係」の会話には、人間関係の構築よりも維持という機能が強く現れると考えられる。従来の配慮表現の研究では、初対面の関係における人間関係の構築や、謝罪などの場面における人間関係の修復・維持が注目されることが多かった。本論文は、親しい関係の雑談を対象とすることで、人間関係の構築や修復を要しない会話であっても、人間関係の維持のためにさまざまな〈配慮〉が現れていることを明らかにするものである。

本論文の〈配慮〉と従来の研究における配慮表現との関係を述べる。まず従来の配慮表現の研究を挙げる。

国立国語研究所 (編) (2006) では、従来の敬意表現の研究は「主に「距離を置く」「上位者として扱う」「改まる」のような待遇意識や対人行動上の指向性が念頭に置かれていた」(p.2) と述べられている。

さらに、国立国語研究所 (編) (2006) は、「会話場면을構成する人的要素や場面的要素に対する配慮が、従来の敬語研究・待遇表現研究で扱われてきた「敬う・へりくだる・改まる」などの他にも様々な種類や内容で広がっている」(p.2) という。「配慮」について、「敬意」という語感から想起される限られた範囲での待遇的配慮を超えた、より広汎な視点」(p.2) であり、「コミュニケーションにおける言語使用を背後で支える各種の意識や心配りを表す語」(p.2) と述べている。

しかし、国立国語研究所 (編) (2006) 以降も、従来の敬意表現以外の配慮の研究は少ない。例えば、三宅他 (編) (2012) では、配慮表現が示される場面が多く取り上げられているが、対象とされている「配慮表現」は、依頼やそれに伴う謝罪や感謝が主である。そこで、本論文は従来の敬意表現以外の観点から〈配慮〉を考察する。なお、本論文では雑談を対象とするため、上下関係やそれに伴う敬体の使用は含まれず、参加者同士は基本的に常体で会話している。

依頼や謝罪などの場面における配慮表現は意図的なことが多いと考えられるが、本論文で対象とする雑談における〈配慮〉は、意図的であるか否かが判断できないことも多い。非意図的であると考えられる笑いなどが会話を友好的に進めようとする態度から生じていると考えられる例も少なからずある。そのため、本論文では、〈配慮〉の意図性は不問とする。

先行研究を参考に、本論文では〈配慮〉を次のように定義する。意図性の有無に関わらず、会話の参加者に対して友好的な態度を示すことで参加者に楽しく会話ができていると感じさせようとする、会話の参加者に踏み込みすぎないようにすることなどで会話をスムーズに進めようとするものの両方を〈配慮〉とする。

本論文における〈配慮〉と関係する先行研究について、「ポライトネスの規則」「力」と「連

帯]、「共話」に分けて述べる。

まず、Lakoff (2017) は、統語規則と同じように会話にもある程度一般化できるルールがあるとし、会話におけるルールに「ポライトネスの規則」があると述べている。「ポライトネスの規則」として「無理強いするな」「選択肢を与えよ」「相手を気分良くさせろ・友好的であれ」の3つが挙げられており、これらは同時に効力を発揮し、補強し合う場合もあるという。Brown & Levinson (1987) によるポライトネス理論では、「無理強いするな」「選択肢を与えよ」がネガティブ・ポライトネス、「相手を気分良くさせろ・友好的であれ」がポジティブ・ポライトネスに当てはまると考えられる。

次に、「力」と「連帯」については、Tannen (1994) が会話に現れる両者の関係を述べている。「力」とは上下関係を示しており、「連帯」とは横の関係、つまり仲間であることを示している。本論文は、ある言語表現や非言語行動が「連帯」を表していると考えられる場合に着目する。

Lakoff (2017) の「ポライトネスの規則」、Tannen (1994) の「連帯」を参考にすると、親しい関係の雑談では、現れる言語表現、非言語行動のほとんどが Lakoff (2017) の「ポライトネスの規則」である「相手を気分良くさせろ・友好的であれ」、Tannen (1994) の「連帯」と関係があるように思われる。しかし実際は、親しい関係の雑談においても、Lakoff (2017) の「無理強いしない」「選択肢を与える」ことを表す言語表現や非言語行動、また、「連帯」を無理に表さないことで、相手に踏み込みすぎないようにする言語表現や非言語行動は現れる。

「相手を気分良くさせろ・友好的であれ」や「連帯」を積極的に表す例として、話者交替の際の積極的なオーバーラップがある。オーバーラップとは、相手の発話に重なって発話することである。オーバーラップは親しい関係における話者交替に多く見られ、「相手を気分良くさせろ・友好的であれ」や「連帯」を積極的に表そうとしていると言える。しかし、親しい関係であっても、オーバーラップを行いつぎると、会話参加者は「会話を横取りされた」「自分の話を聞きたくないのではないか」と感じることになる。適切なタイミング、適切な表現、適切な回数のオーバーラップを行うことで、「相手を気分良くさせろ・友好的であれ」や「連帯」を示しながら、相手に不快感を与えず話者交替ができる。

親しい関係の雑談においては、積極的に「相手を気分良くさせろ・友好的であれ」や「連帯」を表すような言語運用をすることで、楽しく会話ができていると参加者に感じさせるように努める態度が現れやすい。このような態度は本論文の〈配慮〉である。しかし一方で、相手に踏み込みすぎないようにすることで、「相手を気分良くさせろ・友好的であれ」や「連帯」を無理に示しすぎないようにすることで会話をスムーズに進めようとする態度も〈配慮〉であると考えられる。本論文では両方を〈配慮〉とし、会話参加者のお互いに対する〈配慮〉がどのように雑談の中に現れているのかを明らかにする。

### 第3章 調査資料と調査対象

#### 第1節 使用コーパスの概要

本論文は『日本語日常会話コーパス』を使用する。

小磯他 (2022) によると、このコーパスは国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(2016~2021年度)の中で、多様な

日常場面における自然な会話を音声や映像を含めて収録し、公開することを目指し、構築されたものである。

本コーパスは、音声や映像も公開されている点で、雑談の中の〈配慮〉を言語表現、非言語行動の両方から考察するのに最適である。本論文では、2022年3月に本公開された200時間の会話資料の中から後述する条件で選定した資料を使用する。文字化資料を主な調査対象とし、映像資料で音声情報や会話の雰囲気などを確認する。

使用する文字化資料において、特徴的な発音や発話は「転記タグ」とされ、アルファベットや記号などで表されている。本論文内でコーパスから引用した例の転記タグや句読点は、全て文字化資料のままである。本論文内の例に含まれる「転記タグ」を表1に示す。

表1 転記タグ

タグ	概要	例
:	非語彙的な母音の引き伸ばし	なかなか:むずいぞ。
%	非語彙的な音の詰まり	め%ちゃ おっさん なんのかな。
(W)	言い誤り・発音の怠けなどの一時的な発音エラー	お前は (W モ   もう) 知らん。
(D)	語の言いさし	(D ス) 佐々木もいるし。
?	疑問型上昇調 (強調型上昇調は除く)	どうする?。
(T)	小さい声で発話している箇所	(T うーん)。
(L)	笑いが生じている箇所、あるいは単独の笑い	面倒 (L くさいな)。
(U)	聞き取りや語の判別が不確かな箇所	(U 同意) ロックして。
(Y)	漢字表記の一般的な読みと発音が異なる箇所	(Y ケッコ   結構) 辛いんだよね。
(G)	可読性が低い口語表現	(G まあ   ま) するよ?。
。	発話単位末	六月安いです。

## 第2節 調査対象

調査対象とする会話資料は全577資料の中から10資料に限定する。

コーパスの分類に沿って資料の選定を行った。「話者間の関係性」は友人知人のみに限定し、上下関係が含まれるものや恋人は研究対象から除く。「会話時間」は、10分以上の資料の冒頭10分間のみを使用する。「話者数」は視線がわかりやすい2人と3人を対象とする。会話の盛り上がり方や視線が周囲の環境によって限定されやすいと考えられる資料や、会話参加者同士の距離が離れており視線の確認が困難な資料、職場での会話、対面以外の会話形式は「場所」「活動」「備考」を参考に除く。標準語で行われている資料のみを対象とする。

以上の条件から、対象とする会話資料は表2の通りである。話者番号は本論文で独自につけたものである。男性をM+番号で、女性をF+番号で表す。

表 2 親しい関係の雑談 調査対象

資料	会話 ID	話者		概要
1	T010_005	M1	20-24 歳	友人同士で、プロ野球の球団を運営するゲームをビールを飲みながらプレイしている。
		M2	20-24 歳	
2	T006_003	M3	25-29 歳	中学時代の同級生で、家も近く地元でよく会っている。
		M4	25-29 歳	
3	K003_012a	F1	20-24 歳	高校時代の友人同士。見に行く予定であった野球が中止となりレストランで食事することとなった。
		F2	20-24 歳	
4	C001_002	F3	40-44 歳	F3 は友人 F4 の家に宿泊しており、起床後に会話。
		F4	40-44 歳	
5	K002_016	F5	35-39 歳	F5 と F6 は友人同士であり夏期休暇で旅行中。宿泊施設のロビーで休憩しながら会話している。
		F6	50-54 歳	
6	T010_004	M5	20-24 歳	同じゼミの友人同士で授業の合間に雑談。M5 と M7 は高校の同級生でもある。
		M6	20-24 歳	
		M7	20-24 歳	
7	T006_006a	M8	20-24 歳	M8 と M9 は M10 の大学のサークルの後輩で仲がよい。
		M9	20-24 歳	
		M10	25-29 歳	
8	T005_008	M11	35-39 歳	大学時代の同じサークルの同期同士であり、年に 2、3 回会うような仲。レストランで飲み会。
		M12	35-39 歳	
		M13	35-39 歳	
9	W006_001	F7	15-19 歳	小学校・中学校が一緒だが、別々の高校に進学した友人同士。普段は SNS で連絡を取り合い、イベントがある時に直接会っている。
		F8	15-19 歳	
		F9	15-19 歳	
10	K004_008	F10	40-44 歳	F10 の自宅。お互いの子どもたちが小学生の時に入っていたサッカークラブからの付き合いで仲がよいママ友同士の会話。
		F11	45-49 歳	
		F12	45-49 歳	

### 第 3 節 比較対象

現れる言語表現、非言語行動が親しい関係特有のものであることに客観性を持たせるために、親しい関係の雑談と対照的であると考えられる、同コーパス内の「会議・会合」の資料を比較対象とする。

資料の選定の条件としては、会話時間や話者数は親しい関係の雑談資料と同一とし、対面以外の会話形式、及び司会者の役割を持つ参加者が含まれる資料を除く。

以上の条件に基づき、研究対象とする「会議・会合」の会話資料を表 3 に示す。全て常体と敬体が混ざった会話である。資料 13 には、関係性が友人同士の参加者が含まれているが、会話内容が「会議・会合」に合致していること、F13 という第三者が含まれていることから、調査対象に含む。

表3 「会議・会合」調査資料

資料	会話 ID	話者		概要
11	K007_007	M14	25-29 歳	勤務先の大学で特色ある授業を実施するために、初回授業をどのような流れで進めるかを打合せている。
		M15	25-29 歳	
12	W010_001a	M16	30-34 歳	学生時代からの知り合いで、辞書に関する書籍について話し合いをしている。
		M17	25-29 歳	
13	W007_003	M18	30-34 歳	全員が同業者で、共同で仕事を行なうことがしばしばある。F13 がディレクターで、M18 と M19 が撮影スタッフ。
		M19	30-34 歳	
		F13	40-44 歳	
14	T015_011	M20	45-49 歳	ボーイスカウトの地区委員会の引き継ぎや委員会運営の改善点などについて話している。M22 が前期委員長を務めており今期は M20 が委員長を務めている。
		M21	50-54 歳	
		M22	65-69 歳	

## 第4章 話題における〈配慮〉の考察

### 第1節 話題の調査方法

本論文では三牧(1999)に従い、会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体に共通した概念を「話題」とする。

鈴木(1995)を参考に「内容区分調査」を行い、会話資料における話題がどのように転換しているのかを見る。調査は、2023年6月に、筆者と協力者である大学生8人、計9人を1資料につき各4人に割り振って行った。協力者には、会話を話題によって区分し、話題の内容を端的に示すタイトルを文字化資料に記入するように指示した。以下、筆者と協力者を合わせて判定者と呼ぶ。

鈴木(1995)と同様に、複数の判定者による話題区分の指摘が一致し、かつタイトルが共通している部分を、話題転換が起こった場所として認定する。本論文では、以下の2つの条件のいずれかに当てはまる場合を話題転換した場所と見なす。

- ① 3人以上の区分指摘とそのタイトルが一致する場合
- ② 3人以上の区分指摘とそのタイトルが一致し、かつ沈黙や相づち、相づち的表現、「うーん」のような応答表現か相づちか判断が分かれる表現、つなぎ的役割の発話などにより、判定者によって区分指摘が分かれている場合

条件の中の「つなぎ的役割の発話」について、鈴木(1995)から例を引用して述べる。

#### 例1

172 KT あ、その両方で新人賞を、去年の新人賞をほとんどということですか？

173 MR ええ、いただきました。

174 KT で、まあ、あのう、その「つぐみ」は、あの、まあ沢山、賞をねえ、いただいた、

175 MR ええ。

176 KT お貰いになったんですけど。

177 KT 「東京上空」っていうのは、あの、監督が非常に厳しい監督で、

178 MR はい。

179 KT 相米慎二監督と言いまして、

例1の点線の間、発話174と発話175が、鈴木(1995)で、区分の指摘が判定者間で揺れる「つなぎ的発話」と指摘されている部分である。本論文の調査においても、このようなつなぎ的発話が多数見られた。また、つなぎ的発話の前後に、相づちや視線などによって〈配慮〉が表されていると考えられる例があった。よって本論文では、「つなぎ的役割の発話によって区分が揺れた部分」として調査した。

また、本論文では村上・熊取谷(1995)による9種類の連結タイプに従い、話題転換を分類した。村上・熊取谷(1995)によると、話題は、「会話参加者があるトピックをどのようにして確定していくか」という相互作用から見た立場と、「何が語られているのか」という談話内容から見た立場の2つの立場から認定できる。連結タイプは、相互作用から見て「断絶型」「割り込み型」「継続型」の3種類、談話内容から見て「新出型」「派生型」「再生型」の3種類があるという。また、相互作用から見た連結タイプと談話内容から見た連結タイプは互いに影響しあい、「断絶・新出型」「割り込み・再生型」のように組み合わせる。よって、話題には全9種類の連結タイプが想定できるという。

以下に各連結タイプの特徴を簡略に示す。

#### 1. 相互作用から見た連結タイプ

- ・断絶型

明確な終結部がある

しばしば長い沈黙が生じた後、誰かが実質的発話を行い、ターンを取る

- ・割り込み型

会話続行中に他の会話参加者が割り込む形で話題を開始する

- ・継続型

先行する話題の終結後、直ちに後続する話題が開始される

#### 2. 談話内容から見た連結タイプ

- ・新出型

先行する話題の中で全く言及されていなかったことが新しい話題になる

- ・派出型

先行する話題の中で言及された事象から話題が選ばれ、導入される

- ・再生型

先行する話題より前に語られた内容が、再度話題として後続する

## 第2節 話題転換の特徴と〈配慮〉

内容区分調査の結果と村上・熊取谷(1995)による9種類の連結タイプを参考に、親しい関係の雑談における話題転換の特徴を述べ、話題転換の仕方と〈配慮〉の関係を考察する。

調査の結果、村上・熊取谷(1995)の指摘した連結タイプの中で、相互作用から見た3タイプの中では継続型、談話内容から見た3タイプの中では派出型と再生型が多く現れた。また、本論文の話題転換の条件は満たさないが、一部の判定者が継続型、派出型、再生型の話題転換と判断したと考えられる箇所があった。継続型、派出型、再生型はどれも明らかな終結部がない、

内容が連続した話題転換である。このような話題転換が多く見られたため、内容区分調査の際、判定者によって区切りに差が生じるようになった。以下、話題転換の型を〈配慮〉の観点から考察する。

まず相互作用から見た連結タイプについては、断絶型話題転換と割り込み型話題転換があまり見られなかった。断絶型があまり見られなかったことは、親しい関係の雑談資料全体に沈黙が現れていないことと関係している。親しい関係の雑談においては、沈黙を返すという行為があまり好まれず、すぐに反応を示すことが好まれやすいと考えられる。その結果として、沈黙の後に話題転換する断絶型はあまり見られなかったのだと考えられる。割り込み型は、親しい関係でも、話を遮る行為は好まれないためにあまり見られなかったのだと考えられる。これは、話者交替の際に見られた、積極的に相手の発話に重なって反応を示し、好意的であることを表そうとする〈配慮〉とは異なっている。話題と比較して、話者交替は誰が話者になるかの配分が容易である。対して話題は、一度転換させると元の話題に戻すことが難しい。そのため、遮ってまで話題転換を起こす割り込み型話題転換があまり見られなかったのだと考えられる。

このことから、親しい関係の雑談において、断絶型のような話題転換やそれに伴う沈黙をなるべく避けること、割り込み型のような、話題を遮って別の話題を導入する形の話題転換を避けることは、会話をスムーズに進めるための〈配慮〉である。

次に、談話内容から見た連結タイプの中で、新出型話題転換が見られなかった理由として、親しい関係であるからということが考えられる。一見、新出型に見えても、よく内容を見ると、以前話したことを再生していると考えられるものであった。新出型に見えるが、内容から再生型とわかった例を示す。点線部が話題転換と見なす部分である。

## 例2 (資料9: 女性3人)<sup>1)</sup>

		タイトル
52	F7	親しき者にも礼儀あり。
53	F9	(L)
54	F9	礼儀： 今なかったよね。
55	F8	絶対違う (L よ：)。
56	F9	(L)
57	F9	それな。
58	F9	(D ナ) (R (Y リオ   梨緒)) ジモティーのさ あれ来ないんでしょ。
59	F9	クリスマス会 来れないんでしょ。
60	F8	行けな：い。

発話 58 以降、F8 が地元で行うクリスマス会に参加できないという話題になっている。発話 58 以前にクリスマス会に関する話題はないため、一見、新出型の話題転換に見える。しかし、発話 58 の「来ないんでしょ」、発話 59 「来れないんでしょ」には「のだ」「だろう」が使用されている。日本語記述文法研究会 (編) (2003a) は、「のだ」は「その事態をすでに定まったこととして把握したことが表される」(p.202) という。また、「でしょ (だろう)」は「話し手に何らかの判断が成立しているということを前提として、聞き手にその判断を問いかけ、確認を求め

る」(p.38) 確認要求<sup>2)</sup>の機能を持つと述べられている。このことから、F9 は以前から F8 がクリスマス会に参加しないことを知っていたと考えられる。よって一見新出型に見えるクリスマス会についての話題は、会話参加者にとっては再生型の話題と見なす。

このように本論文の会話資料には、新出型の話題転換はあまり見られず、他のタイプの話題転換が多く見られた。このことから、親しい関係の雑談において、派生型や再生型のような、以前の話題と関係する話題を取り入れるのは、会話をスムーズに進めるための〈配慮〉である。また、親しい関係の雑談では、会話参加者がそれ以前の話題についてある程度理解しているという前提を、派生型や再生型の話題転換によって示していた。そうすることは、会話参加者に共通の話題で会話しているという一体感を生むことに繋がり、自分達が親しい関係であるということを示すことにもなる。派生型や再生型の話題転換を行うことは、親しい関係であることを表し、会話を盛り上げる〈配慮〉である。

### 第3節 話題と雑談の目的の関係

会話の状況と話題の関係を見るために、親しい関係の雑談資料の会話の状況を表4に、会議・会合の会話の状況を表5に分けて、以下に示す。

表4 各資料の状況

資料	話者	状況
1	M1 20-24 歳	ゲームをしながらの会話
	M2 20-24 歳	
2	M3 25-29 歳	食事をしながらの会話
	M4 25-29 歳	
3	F1 20-24 歳	食事をしながらの会話
	F2 20-24 歳	
4	F3 40-44 歳	目の前の腕時計に言及しながらの会話
	F4 40-44 歳	
5	F5 35-39 歳	しばしば電話を触りながらの会話
	F6 50-54 歳	
6	M5 20-24 歳	参加者同士が向き合っている会話
	M6 20-24 歳	
	M7 20-24 歳	
7	M8 20-24 歳	1人は途中まで電話を触りながらの会話
	M9 20-24 歳	
	M10 25-29 歳	
8	M11 35-39 歳	食事をしながらの会話
	M12 35-39 歳	
	M13 35-39 歳	
9	F7 15-19 歳	食事をしながらの会話
	F8 15-19 歳	
	F9 15-19 歳	
10	F10 40-44 歳	食事をしながらの会話
	F11 45-49 歳	
	F12 45-49 歳	

表5 各資料の状況(会議・会合)

資料	話者	状況
11	M14 25-29 歳	資料を見て、メモを取りながら会話
	M15 25-29 歳	
12	M16 25-29 歳	資料を見ながら会話
	M17 30-34 歳	
13	M18 30-34 歳	資料を見ながら会話 M18のみ食事をしながらの会話
	M19 30-34 歳	
	F13 40-44 歳	
14	M20 45-49 歳	資料を見て、メモを取りながら会話
	M21 50-54 歳	
	M22 65-69 歳	

表4、表5を見ると、研究対象とした会話資料の中で、資料6以外は全て目の前に何かあり、

それに言及しながら会話を行っていることがわかる。

会議・会合は情報の伝達の完了がゴールである。そのため、第2章であげた先行研究の中でも、Brown & Yule (1983) が述べた“Transactional function”が現れやすいと考えられる。筒井 (2012) では“Transactional function”は「内容のある情報を伝達して具体的な目的を達成することに主眼が置かれるような言語運用」(p.6)と訳されていた。話題には特にその傾向が現れており、会議・会合資料の話題は話し合うべきこと、伝えるべきことにおおよそ沿っていた。

親しい関係の雑談資料ではあるものの、資料1、資料6に話題について会議・会合と似たような傾向が現れていた。資料1は目の前にゲームがあり、ゲームの操作方法やキャラクターに沿った話題が現れている。また、資料6は自分が行っていることの説明が主であり、話題もそれに沿ったものであった。

資料1、資料6以外の親しい関係の雑談資料では、会議・会合の資料とは異なる傾向が見られた。第2章で述べたように、親しい関係における雑談の目的は人間関係の維持である。情報の伝達と比較すると、人間関係の維持には明確なゴールがない。そのため、雑談における話題は資料によって多様であった。特に食事が目の前にある場合、村上・熊取谷 (1995) のいう「再生型」の特徴が見られた。再生型とは、「先行する話題より前に語られた内容が、再度話題として後続する」話題転換である。資料2、3、8、9、10が食事をしながら会話している資料である。このような資料で、参加者は目の前の食事についてときどき「美味しい」「美味い」などの発話によって「食事」という話題を再生させながら会話している。再生型話題転換の例を示す。

### 例3 (資料3: 女性3人)

		タイトル
8	F2	じゃあ じゃあ
9	F2	いただきます。
10	F1	ね。
11	F1	食べよう。
-----		
12	F1	え。
13	F1	め%ちゃ 久しぶりやないですか？。
14	F2	うーん。
15	F2	やば (L い)。
16	F2	(L)
17	F1	ね。
18	F1	何年ぶり：？。
19	F1	結構 来てないよ (L ね)。
20	F2	あ。
21	F2	でもわたし：半年ぶりくらい (W ガ か) も。
22	F1	そういうこと やっちゃうんだ：。
23	F2	うん。
24	F2	め%ちゃうまい。

タイトル

食事開始

久しぶりの来店

小籠包の感想

発話 11 以前は食事についての話題であり、発話 12 の話題転換後は来店が久しぶりであるこ

とについての話題である。その後しばらく「久しぶりの来店」の話題が続くが、発話 23 の F2 の相づちによって話題が一段落した後に食事の話題が「再生型」で現れている。

また、資料 3 ではこれ以降も食事の話題が「再生型」で現れる。以下に、資料 3 の中で例 3 で引用した箇所以降に食事の話題が現れた部分を示す。点線は話題転換が起こった部分を表す。

例 4 (資料 3: 女性 2 人)

		タイトル
130	F2	かっこいい かっこいい。
131	F2	半端ない。
132	F2	さすがって思う。
133	F2	(L)
134	F1	うん。
135	F2	うん。
} 過去の野球の試合		
-----		
136	F1	(W ウーヒー   おいしい)。
137	F2	うん。
138	F1	食べ切っちゃいたいね。
139	F2	うん。
} 食事		
-----		
140	F2	ビール飲も (U う)。
141	F1	絶対ビール合うでしょう。
142	F2	(W ウン (L マイ)   うまい)。
143	F1	まあ オレンジジュースの方が合うけどね。
144	F1	うーん。
145	F2	合う。
} 飲み物の提案		
-----		
146	F1	なん (U で) 中止になっちゃったんだろ。 }
今日の試合中止の原因		

発話 135 から以前は「過去の野球の試合」の話題であり、F1 による相づちの発話 134 「うん」と F2 による相づち的表現の発話 135 「うん」によって話題が一段落している<sup>9)</sup>。このように相づちや相づち的表現を繰り返すことは話題が一段落したことを表す結束性表示行動の一種であると考えられる。話題が一段落した後、発話 136 以降では、再度食事の話題が「再生型」で現れている。発話 146 以降、「今日の試合中止の原因」の話題に転換している。

食事についての話題は参加者に共通であり再生させやすいため、次の話題に転換するまでの間を埋めるような役割があると考えられる。話題の選択に詰まった際に目の前の食事についての話題を再生させることで、参加者全員に共通する話題を提示でき、会話が滞るのを阻止することができる。

雑談において、何かしながらではない場合、また、全く目の前の物事に言及しない場合、話題はあまりにも広くなり、会話参加者は相手に通じる話題を探りながら雑談をすることになる。山内 (2018) においても、話題には難易度があり、身近であるかどうか、専門的であるかどうかなどで分類することができると述べられている。人間関係の維持を目的とし、明確なゴールがない雑談では、多岐に渡る話題の中から、参加者間で身近さや専門性が共通しており、かつ相手に不快な思いをさせないような話題を選択する必要があると考えられる。そのような特徴を持つ雑

談では、目の前に何かある方が、それに言及するという形で参加者全員に共通する話題を選択することができ、会話が滞るのを阻止することができるのではないだろうか。参加者全員に共通する話題を提示することは、会話を盛り上げようとする、また、スムーズに進めようとする〈配慮〉である。

## 第5章 話者交替における〈配慮〉の考察

### 第1節 話者交替の調査方法

話者交替の定義には、Sacks & Jefferson (1974) における「TCU (turn construction unit)」という単位を使用する。非言語行動、相づちを除く全ての発話を「実質的発話」とし、実質的発話を一つの TCU と見なす。会話参加者の実質的発話によって TCU が成立し、その後他の会話参加者によって新たな TCU が成立した場合、話者交替したと見なす。また、話者による、相づちの表現、笑いなどを含む、話者交替するまでの発話全てを「ターン」と呼ぶ。

実質的発話と見なさない発話について述べる。相づちや笑い声のみの場合、実質的発話とは見なさない。これらの例外として、発話中に相づちや (L) が入っている場合、つまり相づちと実質的発話が混じっている発話や笑いながら話している発話は実質的発話と見なす。次の例5の (L) 内は笑いながら話している発話であり、笑いを含めて実質的発話と見なす。

例5 (資料4: 女性2人)

296 F3 トラ (L イアスロンのショップだとね)。

話者交替とターンの示し方について述べる。例6は相づちを含む話者交替である。実線は筆者によるものであり、話者交替したと見なす部分を示す。「ターン」列には誰のターンかを記載する。

例6 (資料4: 女性2人)

ターン

82	F3	F3 終	モードを変えればってこと？。
83	F4	F4	なんかね これを押すと
84	F4	F4	CO ツーとかも出るよ。
85	F4	F4	よくわかんねえ。
86	F3	F4	ふーん。(相づち)
87	F4	F4	(D タ) 気温も出るの。

相づちである発話86以外は実質的発話と見なす。話者がF3からF4へ変わっている実質的発話82と実質的発話83の間で話者交替が起こったと見なす。発話85、86間では、話者は変わっているが発話86は実質的発話ではないため、話者交替はしていないと見なす。したがって、発話82は「F3のターン」、発話83から発話87は「F4のターン」と見なす。

## 第2節 話者交替の際の質問と〈配慮〉

研究対象に多く見られた話者交替の方法に、他の参加者への質問がある。話し手は、質問することで話者交替を促し、自分以外の参加者にターンを配分することができる。話者交替の日欧対照研究である大浜（2000）は、日本語の話者交替を欧米と比較して「他者への配分も自己への配分も控える傾向にある」（p.161）と述べている。そのような傾向がある会話の中で、質問によって話者交替を促すのは、適切なタイミングで違和感なく話者交替を行える有効な手段である。

ただしこれは会議・会合にも見られたため、親しい関係の会話特有の〈配慮〉とは言えない。親しい関係における話者交替時の相手への質問の特徴としては、予め決めていることなど、相手の意思があまり重要ではない場面にもかかわらず、相手の意思を確かめるような質問がある。相手への質問が特に多く見られた資料9から例を示す。実線が話者交替した箇所である。

例7（資料9：女性3人）

556 F9 豚も一応

557 F9 (U 行っ) とく？。

---

558 F7 ロースのがよくない？。

---

559 F9 (Y イチオ | 一応) (Y ニー | 二) にしとく。

例7は、鍋に入れる具材についてメニューを見ながら3人で話し合っている場面である。F9は発話556で豚肉を入れるかどうか聞いている。それに対してF7は別の肉である(牛)ロースを勧めている。しかし、結果としてF9は豚肉を入れることを決めている。このことから発話556はF7の返答をあまり重視していない質問であることがわかる。しかし、このような質問を行うことは、F9がF7を会話参加者として認めていることを示すことになる。

また、上昇イントネーションだが相手の明確な答えを期待していない質問も見られた。

日本語記述文法研究会（編）（2003a）では、質問の基本的性質として「話し手に不明な情報があるため判断が成り立たない」（p.20）ないこと、「聞き手に問いかけることによって疑問の解消を目指す」（p.20）ことの2つが挙げられている。本論文において重要な確認要求の疑問文は、質問の基本的性質の中で「話し手によって不明な情報があるため判断が成り立たない」（p.20）という条件を欠くものであり、「話し手に何らかの判断が成立しているということを前提として、聞き手にその判断を問いかけ、確認を求めるという機能をもっている」（p.38）と述べられている。語形は「だろ（だろう）」「ではないか（じゃないか）」「ね」「よね」に限定されているという。日本語記述文法研究会（編）（2003a）では「期日までには、返してくれるよね？」（p.42）のような例文が挙げられている。

上昇イントネーションだが相手の明確な答えを期待していない質問はこの確認要求に似た性質を持つと考えられる。親しい関係の雑談の中に現れる相手への質問には、確認要求に似た性質を持つと考えられるものが多く見られた。例を示す。実線が話者交替した部分である。

例8（資料1：男性2人）

1 M2 星野仙一でいいんじゃない。

2 M2 指導力 二。

3 M2 よく監督できたね。

4 M2 じゃ 坂東で (W イ | いい) ?。

5 M1 坂東でいいよ。

例8の発話4は相手の意思を確かめる質問である。文脈から、「坂東でいいよね?」という確認要求と同じ意図で発されていると考えられ、相手からの明確な返答は期待していない質問である。

会議・会合にも質問は見られたが、日本語記述文法研究会(編)(2003a)のいう質問の基本的性質「話し手に不明な情報があるため判断が成り立た」(p.20)ないこと、「聞き手に問いかけることによって疑問の解消を目指す」(p.20)ことのどちらも満たす、典型的な質問がほとんどであった。会議・会合の質問の例を示す。

例9(資料12:男性3人 会議・会合)

569 M17 個別のことじゃない

570 M16 うん うん。(相づち)

571 M17 こと: 先に片付けます: ?。

572 M16 うん。

例9のような典型的な質問と対照的に、雑談には、相手からの明確な返答を期待していないのに、あえて相手の意思や判断を確認するような質問が現れやすい。積極的に頻繁に質問することで、相手に関心を持っていることを示し、友好的な態度を表そうとしていると考えられる。また、相手の意思や考えを問うことで、ゲームや会話を協調的に進めようとする意思表示になるとも考えられる。そのため、このような質問は友好的な態度を示し、協調的に会話を進めようとする〈配慮〉と言える。

## 第6章 相づちにおける〈配慮〉の考察

### 第1節 相づちの調査方法

本論文における相づちの定義を述べる。形態については、堀口(1988)に従い「相づち詞」、話し手の発話の「繰り返し」、「言い換え」を相づちとする。また、「あーはい」のように複数の形態が組み合わされているものも、相づちとする。

機能については、松田(1988)で挙げられた大きく分けて6種類(1. 聞いているという信号、2. 理解しているという信号、3. 同意の信号、4. 否定の信号、5. 感情の表出、6. 間をもたせる)の分類に従う。

質問や命令など、相手からの反応が必須である発話に対して発話がなされた場合、形態が相づちと同じであっても実質的発話と見なす。ただし、文脈から明確に、実質的発話であることの根拠を示すことができる場合以外は、全て相づちに含む。

相づちの出現位置については水谷(1988)の「話の進行を助けるために、話の途中に聞き手が入れるもの」(p.4)という規定に従う。

## 第2節 相づちの回数と〈配慮〉

表6に親しい関係の会話資料1から10までの相づち率を示す。「相づち率」列は、相づちの数を総発話数で割った値である。

表6 各資料の相づち率

資料	話者	相づち数	総発話数	相づち率	状況
1	男性2人	53	704	7.5%	ゲームをしながら会話
2	男性2人	41	311	13.2%	食事をしながら会話
3	女性2人	66	426	15.5%	食事をしながら会話
4	女性2人	185	574	32.2%	目の前の腕時計に言及しながら会話
5	女性2人	63	503	12.5%	しばしば電話を触りながら会話
小計		408	2518	16.2%	
6	男性3人	225	621	36.2%	参加者同士が向き合って会話
7	男性3人	145	620	23.4%	1人は途中まで電話を触りながら会話
8	男性3人	110	593	18.5%	食事をしながら会話
9	女性3人	104	650	16.0%	食事をしながら会話
10	女性3人	355	1113	31.9%	食事をしながら会話
小計		939	3597	26.1%	

相づち率を見ると参加者が2人の場合が平均16.2%、参加者が3人の場合平均26.1%であり、参加者が3人の方が相づち率が高い。

参加者が3人の場合、話し手以外の2人が同時に相づちを打つことが多い。参加者が3人の例を示す。開始列、終了列には、その発話の開始時間、終了時間を秒数で示す。

## 例10 (資料9：女性3人)

	開始	終了		
88	85.388	86.443	F7	友梨奈はなんかね。
89	86.961	87.118	F9	え。(相づち)
90	87.118	88.811	F9	友梨奈 なんかそう それ 思った。(相づち)
91	87.792	89.496	F7	なんか そうゆう そうゆうのはちょっと。
92	89.037	89.167	F8	え。(相づち的表現)
93	89.167	89.691	F8	そうなの？。
94	90.467	92.19	F7	しっかり しっかりやってそうなのに。

F7による発話88とほぼ同時にF9が発話89・90で「え 友梨奈 なんかそう それ 思った」と相づちを打ち同意を示している。発話88の内容は発話91につながっているため、F9はF7の発話中に割り込む形で、同意を示したことになる。発話92は相づち的表現であり、相手の発話と同時に発されている<sup>4)</sup>。

このように参加者が3人の場合、話し手以外の2人が同時に相づちを打つことが多かった。参加者数が増えると、1人の話し手に対して、相づちを打つ聞き手の人数が増えることになる。そのため、参加者数が多いほど相づち率が高くなったのだと考えられる。

相づちを、場合によっては話し手の発話に重なるように打つことで、話し手の話に対して関心を持って聞いていることを表そうとしていると考えられる。これは相手に友好的な態度を示すための〈配慮〉である。

また、資料4は話者数が2人であるにも関わらず相づち率が高いが、これには話題が関係している。資料4はF4がF3に自分が今しているトライアスロンや、それに関わる腕時計について説明する話題が中心の資料である。相づち数の個人差を見たところ、説明している側のF4(11回)より、説明されている側であるF3(174回)のほうが多く相づちを打っていた。

このことから、親しい関係であっても、他の参加者によって説明されている間は、会議・会合と同じように、積極的に相づちを打ち、説明の内容を最後まで聞こうとする態度が必要である。親しい関係であっても話題によって相づちの回数を変えるのは、スムーズに会話を進めるための〈配慮〉である。また、聞き手になった時に相づちをうち、聞き手の役割に沿った反応をすることは、会話を盛り上げる、また、スムーズに進めるための〈配慮〉である。

次に相づち率を会議・会合と比較する。表7に会議・会合の会話資料11から14までの相づち率を示す。

表7 各資料の相づち率(会議・会合)

資料	話者	相づち数	総発話数	相づち率	状況
11	男性2人	97	440	22.0%	資料を見て、メモを取りながら会話
12	男性2人	152	612	24.8%	資料を見ながら会話
13	男性3人 女性1人	177	561	31.6%	資料を見ながら会話 M18のみ食事をしながら会話
14	男性3人	145	532	27.3%	資料を見て、メモを取りながら会話

表7を見ると、最も相づち率が低い資料11でも22.0%であり、親しい関係の雑談資料1、2、3、5、8、9はそれより相づち率が低い。これらのうち、資料8以外は、いずれの資料も話者交替率は会議・会合の資料より高い。したがって、相づちを打つことよりも実質的発話を返すことを優先した結果、相づち率が低くなったのだと考えられる。相手の発話の続きを促す相づちより自分の実質的発話を優先することは、親しい関係の雑談の特徴と言える。

相づちより実質的発話を優先することは、一見すると〈配慮〉に含まれない言語表現に見える。しかし、雑談において、相づちによって相手の話を促すことばかり行い、話し手にならなければ、会話を盛り上げているとは言えない。よって、親しい関係の雑談において自分も話し手になろうとすることは、適切な回数で、適切な表現を使用すれば〈配慮〉と言える。

### 第3節 「繰り返し」の相づちと〈配慮〉

相づちの形態の一種として「繰り返し」がある。資料1、7、10に「繰り返し」の相づちが多く見られた。

まず資料1の「繰り返し」の相づちの特徴を述べる。資料1は、参加者2人がゲームをしながら、その設定について話し合っている資料である。視線も参照するとゲームの画面に表示されているであろう単語を参加者が発し、それを他の参加者が繰り返す形の相づちが多く見られた。参加者の1人が手元のリモコンで操作を行いながら話す場面も見られ、そのような場合にも「繰り返し」の相づちが見られた。例を示す。

## 例 11 (資料 1: 男性 2 人)

- 99 M1 キャンセルでしょ。  
100 M2 キャンセル。

下線部が「繰り返し」の相づちである。M2 は発話 100 と同時に手元のリモコンで操作を行っている。ゲームなどの最中には、細かい操作を行いながら相手に同意を示す、もしくは相手の指示通りに動作を行う場面がある。このような場面で「繰り返し」の相づちを発すると、相づちを打つ側は沈黙を避けることができ、動作を確認しながらの操作もしやすい。動作をしながらも相づちを打とうとするのは、沈黙を避け、会話を盛り上げるための〈配慮〉である。

また、親しい関係の雑談における「繰り返し」の相づちは、文脈に会議・会合との違いが見られた。会議・会合における「繰り返し」の相づちは主に話し手の発言内容を改めて確認しようとする際に多く用いられていた。例 12 下線部が繰り返しの相づちである。

## 例 12 (資料 13: 男性 2 人・女性 1 人 会議・会合)

- 396 M18 S ワンを動かすってことですね。  
397 F13 うん。  
398 M19 (T S ワン)。

例 12 は映像を撮影する際の機材の動きを確認している場面である。M18 の発話 396 に対し、F13 が肯定の相づちを返しており、ほぼ同時に M19 が発話 398 を小さな声で発言している。小宮 (1986) では小さな声の相づちについて、「弱まった声の分だけ意識が自己の内面に向かい、自分なりに考えているという印象を受ける」(p.61) と述べられている。発話 396 の内容を小さな声で相づちとして再度言うことで、M18 の発言内容を認識しようとしていると考えられる。例 12 の他にも、相手の発言内容を繰り返すことで、発言内容や情報を改めて認識しようとしていると考えられる「繰り返し」の相づちが見られた。

対して親しい関係の雑談には、冗談や褒めの繰り返しが多く見られた。会議・会合と同じような、発言内容や情報を認識しようとする「繰り返し」の相づちも見られた。しかし、会議・会合ほど情報が重要ではない場面で見られ、内容も話し手の発言内容に同意を示すものや好意的なものがほとんどであった。これは会議・会合の、話し手の発言内容に中立であり、ただ認識しようとしている「繰り返し」の相づちとは異なる。以下に、親しい関係の雑談において相手の発言内容に同意を示している「繰り返し」の相づちの例を示す。

## 例 13 (資料 5: 女性 2 人)

- 開始 終了
- 217 258.354 259.786 F5 でもハワイ島も狭いよね。  
218 259.483 259.957 F6 狭い。  
219 259.786 260.538 F5 びっくりするぐらい。  
220 260.658 260.877 F6 (T うん)。  
221 260.761 260.918 F5 いや。  
222 260.918 262.563 F5 (D コ) こんなちっちゃいの って感じだよね?。

下線部が、F5の発話217に同意している「繰り返し」の相づちである。一見、実質的発話のように見えるが、開始時間、終了時間を見ると、発話217と219は間を開けることなく発されている。「～よね」という確認要求の形をとってはいるものの、相手の反応をほとんど期待していないと考えられる。

このような相づちが、親しい関係の雑談資料には多く見られた。また、声量も大きく、場合によってはイントネーションの起伏も大きく、頷きや笑いを伴うこともあった。小さな声や、平坦なイントネーションでの相づちが見られた会議・会合の資料とは異なる。「繰り返し」の相づちを打つ際に内容や動作で同意を示すことは、相手に友好的な態度を示す〈配慮〉であると言える。

#### 第4節 独話的な用法を持つ「あ。」と〈配慮〉

相づちかどうか判断が分かれるものに感動詞「あ」がある。感動詞「あ」の中には、水谷(1988)が述べた、「話の進行を助けるために、話の途中に聞き手が入れるもの」(p.4)という相づちの定義に必ずしも当てはまらないと考えられるものもある。田窪・金水(1997)は、このような「あ」の例文として「あっ、飛行機だ」(p.269)を挙げている。

このような「あ。」は水谷(1988)のいう「話の進行を助けるために」(p.4)のものではない点で、相づちとは異なると考えられる。田窪・金水(1997)でもこのような「あ。」について、発見や思い出しの機能があり、「対話だけでなく、むしろ独り言として発話されることを基本とする」(p.268)と述べられている。しかし多数の先行研究では、「あ、そうですか」のような組み合わせの形も含め、相づちの一形態とされている。

本論文の調査対象に、完全な独話と言えない感動詞「あ」は202回見られた。本論文の調査資料は会話であり、聞き手が存在するため、独話にも用いられる感動詞も相づちの一形態とし、その用法と〈配慮〉との関わりを考察する。

親しい関係の雑談の中で使用される感動詞「あ。」には、野田(2006, 2014)のいう「疑似独話」が関わると考えられる。独話的な性質を持つと考えられる「あ。」の例を示す。

##### 例14 (資料10: 女性3人)

- 660 F10 (R 謙三郎) 目玉焼き嫌いなのよ：。  
 661 F12 あ。(感動詞)  
 662 F11 そうなの。(相づち詞)  
 663 F12 あ そうなんだ。  
 664 F11 あら。  
 665 F10 (D 夕) 目玉焼き嫌いだと困らない？。

発話661が独話的な性質を持つと考えられる「あ。」である。毎朝の朝食についての話題の中でF10の息子の好みについて話している場面である。発話661「あ。」は、水谷(1988)が述べた、「話の進行を助けるために、話の途中に聞き手が入れるもの」(p.4)という相づちの定義に当てはまる点で、完全な独話用法ではない。

本論文において相づちに分類される「あ。」は、ほとんどが「そうなの?」「そうなんだ」のように「そう」に付随する形で使用されていた。このような「あ。」は、田窪・金水(1997)が述

べた「相手の発話に触発されて、自分で改めて発見したり、想起したりしたことを表す」(p.269)ものだと考えられる。大浜(2002)でも相づちの形態としての「あ。」について、「相手の発話が聞き手にとって納得できることを示す」(p.7)と述べられている。

「あ」によってその情報を知らなかったことを相手に示しながら、「そう」によって納得を示すことで、「自分は理解したので話を進めてほしい」というサインを発することになり、他の参加者が会話をスムーズに進める一つの指標になると考えられる。よってこのような「あ。」を使用することは〈配慮〉に繋がる。

「疑似独話」の観点からこの「あ。」を見る。「疑似独話」とは、野田(2014)で、対話場面において、独話形式でありながら「聞き手の存在しない完全な独話や心内発話とは異なり、聞き手の存在を多少なりとも意識していると考えられる場合」(p.59)の発話であると述べられている。「あ。」は基本的には独話的な性質を持つ。独話的な感動詞を相づちとして使用することは、自分の心内発話を相手に示すことに繋がる。野田(2006, 2014)では「聞き手の存在を多少なりとも意識していると考えられる」(p.59)と述べられていることから、このような「あ。」は、聞き手の存在を多少なりとも意識しており、結果として自分の心情や心内を聞き手に示すことになると考えられる。「あ。」によって話し手に自分がその情報を知らなかったことを示し、自分が理解したということや、驚き、相手の話に興味があるということを表すことができる。よって「あ。」を使用することは、相手の話に興味を示し話の続きを促す、会話を盛り上げるための〈配慮〉である。

## 第7章 相づち的表現における〈配慮〉の考察

### 第1節 相づち的表現の定義

郭(2003)は、相づちと似た言語表現として「相づち的表現」があると指摘している。例15で、郭(2003)による「相づち的表現」を示す。下線は筆者によるものである。

#### 例 15

- 1 うちでも妹が 2週間ぐらい 前に結婚したんですけどね
- 2 あ そうですか おめでとうございます (p.50)

発話2の下線部「あ そうですか」が相づち的表現とされている。このような発話は、郭(2003)以前の研究では「話し手が発話権を行使している間に聞き手から送られた」(p.50)という出現位置ではないため相づちと見なされてこなかったが、機能的な観点から見ると、情報の了解を示す相づちとして扱うことができる。郭(2003)はこのような発話に焦点を当て、出現位置は相づちと異なるが、相づちの機能を果たしている「相づち的表現」と定義し、その役割を考察している。

本論文では郭(2003)に従い、相づちと同じ形態、機能を持ち、かつ、相づちの出現位置である「話し手が話している途中」以外の部分に出現する発話を相づち的表現と見なす。出現位置についてより詳しく述べると、本論文において相づち的表現と見なす発話は、「相づちと異なる位置に出現し、なおかつ直前の実質的発話と重なることなく、直後の自分の実質的発話と間を置かず発されている発話」である。

第2節では、このような相づち的表現の中で、ターン冒頭に出現しているものについて考察する<sup>5)</sup>。

## 第2節 ターン冒頭に出現する相づち的表現と〈配慮〉

親しい関係の雑談においてターン冒頭に出現する相づち的表現の形態について述べる。

まず「あー」や「はい」、その繰り返しターン冒頭に多く見られた。どちらの形態も、文脈から「話し手が伝えた情報の了解を伝える」「納得を示す」機能を持つ相づち的表現と考えられる。ターン冒頭に現れる相づち的表現「あー」の繰り返しの例を示す。

### 例 16 (資料 8 : 男性 3)

- 386 M12 買い物とか身振り手振りだし：。  
 387 M11 あー あー あー。  
 388 M11 (D ン) (U で) 周りに日本人 結構いるから。

下線部が相づち的表現、実線は話者交替したと見なす部分である。M11が「あー」の繰り返しをターン冒頭に示した例である。M11はM12の発話386に対して、ターン冒頭に相づち的表現「あー」を使用することで「情報の了解」、「納得」を示しながら話者交替している。

郭(2003)でターンの冒頭は「聞き手と話し手の共存」の部分と述べられている。ターンを取る際にいきなり実質的発話から入ると、無理やり発話権を取り、相手の会話を遮ったように思われる場合があると考えられる。「あー」や「はい」、その繰り返しによってまず話し手に「自分は話し手の話の内容を理解した」もしくは「話し手の話の内容に納得した」という信号を出してからターンを取り自分の話を始めることで、話し手は発話を遮られたように感じる事が少なくなる。このような相づち的表現をターン冒頭を使用することは、スムーズに会話を進めようとする〈配慮〉である。

次に「あー」や「はい」、その繰り返し以外にターン冒頭に見られた相づち的表現である、「そう」やその繰り返しについて述べる。文脈から「正しいという同意を伝える」、「共感を伝える」機能を持つ相づち的表現と考えられる。

例17は、参加者数3人の共通の友人について語っている場面である。発話172の後は相づち的表現と関わりが薄いため省略するが、「その友人は写真をインスタグラムに載せない」という旨の会話が続く。

### 例 17 (資料 9 : 女性 3人)

- 168 F8 女子とめっちゃさ  
 169 F8 遊んでる感じがする。  
 170 F9 え。  
 171 F9 (G そう | そ) (G そう | そ) (G そう | そ)。  
 172 F9 つかさ 全然載っけないじゃん。

下線部が相づち的表現、実線は話者交替した部分である。F9が発話170、171の相づち的表現によって何度も同意や共感を伝えてから自分の意見を述べている。

例 17 のように、同意や共感を表す相づち的表現のターン冒頭に何度も使用することは、相手に好意的な態度を表そうとしていると考えられ、親しい関係の雑談における〈配慮〉である。

また、相づち的表現「そう」は、反対意見を述べる場面にも使用されていた。例を示す。例 18 は雨天中止になった試合について話している場面である。

例 18 (資料 3 : 女性 2 人)

182 F1 お金も返ってくるしね。

183 F2 そう そう そう そう。

184 F2 でもね： 何よりもさ 見たかったな：。

下線部が相づち的表現、実線は話者交替した部分である。試合が、途中で中止になるよりも始めから中止になって良かったと述べる F1 に対して、F2 が発話 182 によって「同意」「共感」を伝えている。直後に発話 184 で「でもね」と反対意見を示している。

例 18 のような直後に反対意見を述べるような場面において、発話 183 のような相づち的表現は、部分的な同意、共感を表し、完全な反対意見ではないということを表そうとしていると考えられる。

また、「うーん」という「否定的な気持ちや疑いを示す」機能を持つと考えられる相づち的表現もターン冒頭にいくつか見られた。日本語記述文法研究会 (編) (2003b) は、「うーん」は「意向の保留を示すことによって断りの談話展開を予告的に暗示する」(p.298) という。

日本語記述文法研究会 (編) (2003b) は、特に日本語の談話は「相手の意向を察し合い、共同で談話を作り上げていく傾向が強」(p.299) く、「談話展開が双方によって予測可能なものになるとともに、待遇的配慮を示すことにもつながる」(p.299) という。日本語記述文法研究会 (編) (2003b) の指摘から、親しい関係であっても、反対意見やあまり同意的ではない印象を与えるような考えを述べる場合、予めターン冒頭に相づち的表現を使用して相手に否定の予兆を示してから自分の意見を述べるのが好まれると考えられる。親しい関係の雑談において、反対意見を述べる際に、ターン冒頭に相づち的表現を使用して相手に予め否定的な気持ちを示してから自分の意見を述べることは、参加者を不快にさせないようにするための〈配慮〉である。

## 第 8 章 笑いにおける〈配慮〉の考察

### 第 1 節 笑いの調査方法

笑いは意図的ではない場合が多いと思われるが、第 2 章で述べた通り、本論文では意図性の有無を問わず、考査の対象とする。

橋元 (1994) は笑いのコミュニケーション的機能について、6 種類の大分類を示している。その中で、笑いは単に面白い時だけではなく、攻撃的な場面でも現れることが指摘されている。そのため、笑いが発されている間の会話の雰囲気や映像資料で調査する。

文字化資料で、笑いは秒数とは関係なく (L) と記されている。本論文では、笑いのみの場合と笑いを伴う発話を分けて調査し考察する。文字化資料で (L) のみ表記されているものを「笑いのみ」、(L) と同時に発話が行われているものを「笑いを伴う発話」、両方を合わせて「笑い」と称する。

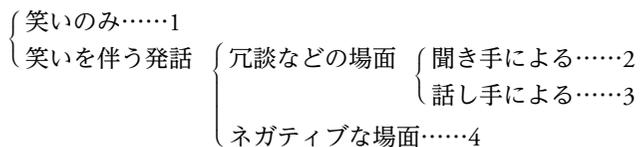
## 第2節 親しい関係の雑談における笑いの役割

まず各資料における笑いの回数を見る。表8に親しい関係の雑談資料の「笑い率」を示す。「笑い率」列は、「笑いのみ」と「笑い+発話」の数を総発話数で割った値である。

表8 各資料の笑い率

資料	話者	笑いのみ	笑い+発話	笑い	総発話数	笑い率
1	男性2人	11	5	16	704	2.3%
2	男性2人	45	11	56	311	18.0%
3	女性2人	26	12	38	426	8.9%
4	女性2人	14	10	24	574	4.2%
5	女性2人	6	3	9	503	1.8%
小計		102	41	143	2518	5.7%
6	男性3人	44	13	57	621	9.2%
7	男性3人	88	20	108	620	17.4%
8	男性3人	134	52	186	593	31.4%
9	女性3人	73	27	100	650	15.4%
10	女性3人	49	18	67	1113	6.0%
小計		388	130	518	3597	14.4%

親しい関係の雑談全ての資料に笑いや笑いを伴う発話が見られた。また、全ての資料で笑いを伴う発話より「笑いのみ」の方が多い。以下では、親しい関係の雑談における笑いの〈配慮〉に関わる役割を以下の4つに分けて考察する。



まず1つ目の役割として、「笑いのみ」の場合、笑いそのものがポジティブな応答表現、もしくは相づちになると考えられる。例を示す。資料9は女性3人が食事をしながら、小学5年生のハロウィンの時に開いたパーティーについて会話している。例19は其中で、携帯電話で写真撮影をしたか話している場面である。

例19 (資料9: 女性3人)

- 312 F9 でも あたし 写真撮ったよね。  
 313 F8 確かに。  
 314 F9 ってか焼いてたもんね。  
 315 F8 (L)  
 316 F8 (L 焼いてた)。  
 317 F9 (L)

例 19 の下線部、発話 315、317 が、笑いが応答表現として現れている部分である。発話 316 は、発話 314 に対する相づちと見なす、笑いを伴う発話である。発話 315、317 は共に「うん」など、親しい関係の雑談で用いられやすい相づちに変えることもできる。映像資料では顔みや視線の交わりも見られ、会話の雰囲気は好意的であった。橋元（1994）で、会話進行調整的機能を持つ笑いは応答になると指摘されている。また、親しい関係の雑談では、相手の発話に対して「話の進行を助けるために、話の途中に聞き手が入れるもの」である相づちを多く返そうとする。例 19 のような笑いは、応答表現、もしくは相づちとして話の進行を助けるために入れられていると言える。参加者数による差からも、笑いは相づちと同じような役割を持つと考えられる。表 9 に参加者数による「笑いのみ」の回数の差を示す。「笑いのみ率」列は、「笑いのみ」の場合の数を総発話数で割った値であり、その資料にどれだけの割合で「笑いのみ」が現れているかを表す。

表 9 笑いのみの場合の人数

参加者数	資料	笑いのみ	総発話数	笑いのみ率
2 人	1, 2, 3, 4, 5	102	2518	4.1%
3 人	6, 7, 8, 9, 10	388	3597	10.8%

「笑いのみ」には参加者数によって差があることがわかる。これは、第 6 章第 2 節で述べたように、参加者が多いほど話し手に対して相づちなどの反応を返す人数が増えるためであると考えられる。このことから、笑いは相づちと同じような役割を持つと考えられる。例 19 のような応答としての笑いは、会議・会合を含む全ての調査資料に見られ、基本的に同意などポジティブな感情を表すような発話と同時に発されている。笑いによって相手に応答することは、会話を盛り上げるための聞き手の〈配慮〉であると言える。

次に笑いを伴う発話を中心に考察する。

まず冗談や、笑いを誘う発話が見られている場面に見られる笑いの役割が 2 種類ある。聞き手からの笑いと話し手からの笑いである。

親しい関係の雑談資料には、冗談や、笑いを誘う発話と同時、もしくはその前後に、笑いや笑いを伴う発話が発されている場面が多く見られた。Brown & Levinson (1987) がいうように、冗談はポジティブ・ポライトネスの要素の 1 つであり、親しい関係では好まれると考えられる。対して、会議・会合の資料の会話内容は改まった、硬いものであるため、冗談や、笑いを誘う発話が好まれない。そのため、冗談や、笑いを誘う発話に対する、笑いや笑いを伴う発話は少なかった。

資料 8 から冗談や、笑いを誘う発話と同時か直後に発されている笑いや発話の例を示す。例 20 の場面は、M12 の妻が海外で入国審査を行った際に起こったトラブルについて M12 が他の参加者に説明している場面である。

例 20 (資料 8 : 男性 3 人)

323 M12 で 五十ユーロって書こうと思ってさ： 五十って (W ワイ | 書い) て：。

324 M11 (L)

325 M11 (L)

- 326 M11 (L)  
 327 M12 で ユーロとか C に：さ： こう 横棒二本書くじゃん。  
 328 M11 (L)  
 329 M13 うん。  
 330 M12 (L で：)  
 331 M12 (L)  
 332 M11 (L)  
 333 M12 (L あれを間違えて：縦に二本書いて：)  
 334 M13 (L)  
 335 M12 (L (D セン) セントになるじゃん。)  
 336 M13 (L)

聞き手からの笑いに関して、大津（2004）は会話における冗談がどのようにして冗談と認識されるのかを述べている。発話の繰り返しや韻律操作などいくつかの合図によって「これは冗談だ」というメッセージが発せられていると述べられており、さらに水川（1993）を参考に、冗談の後の笑いが「これは冗談だ」ということを理解した証拠になっていることから、冗談と笑いには隣接対が形成されているという。

聞き手からの笑いには大津（2004）が水川（1993）を参考に指摘した、「冗談を理解した」ということを表す機能がある。また、橋元（1994）が指摘した中で、楽しいから、面白いから、満たされたからという理由で現れる「感情表出」の機能、相手の冗談や笑いを誘う発話に対して笑ってあげようとする「会話進行調整的機能」があると考えられる。

一方、話し手からの笑いは聞き手に笑ってほしいところを示すために発されていると考えられる。大津（2004）のいうように、冗談は笑いと同接対になっているため、話し手によって発された冗談が受け入れられるためには、聞き手に笑ってもらう必要がある。冗談の場合、笑ってほしい箇所はわかりやすいが、例 20 のようなトラブルや笑いを誘うような発話の場合、聞き手が笑って良いのかわからない場合や笑ってほしい部分がわかりにくい場合がある。このような場面で話し手は、聞き手が笑いを入れるかどうか迷わないように率先して笑うことで、自分の発話が冗談であることや笑ってほしいことを示していると考えられる。

冗談や、笑いを誘う発話と同時に発される笑いの役割 2 つについてまとめる。話し手による笑いは、聞き手に対して笑いを入れるべき場所を示すことになる。聞き手による笑いは、笑いを入れるべき場所を理解し、了承したこと、また、面白いと感じたということ、相手の発話に対して笑ってあげようとしていることなどを表す。どちらも参加者が互いに気持ちよく、スムーズに会話を進めるための〈配慮〉であると考えられる。

笑いの役割の 4 つ目は、ネガティブな発話や文句が現れている場面に見られ、そのような発話を和らげる笑いである。例を示す。例 21 は、ソーシャルゲームに課金をして会員になるかについての話題の中で、M9 が自分に利益がある月のみ会員になるという内容の発話をした後に M10 に批判される場面である。

## 例 21 (資料 7: 男性 3 人)

開始 終了

- 63 55.897 58.585 M10 だってね： かつてね (Y ボー | 某) (Y ボー | 某)  
(R 落合) さんもね：
- 64 58.228 58.764 M9 (W アイ | はい)。
- 65 58.729 60.53 M10 (R ほっ) さんのことね： 心が冷たいって言 (U っ)。
- 66 59.52 59.817 M9 あー。
- 67 60.273 64.266 M9 (L)
- 68 60.53 61.134 M10 (L)
- 69 60.9 62.082 M8 心が (L 冷たい)。
- 70 55.897 58.585 M10 冷たい人間だって (U 言っ)。

下線部は全て笑いを伴う発話である。発話 65 と 68 は分けられているが、間で話者交替しておらず M10 のターン内に発されていること、間をおかずに発されていることから、発話 65 と 68 を合わせて笑いを伴う 1 つの発話と見なす。「M9 (ほっさん) の心が冷たい」というネガティブな発話と共に発されている。M9 の発話 66 の「あー。」は曖昧な同意を表す相づちであり、発話 67 と合わせて笑いを伴う 1 つの発話と見なす。M8 の発話 69 は相づち的表現と見なす、笑いを伴う発話である。発話 65 の一部を繰り返すことで、同意、もしくは中立の態度を示している。以上全ての発話は、「M9 の心が冷たい」というネガティブな発話に対して同意を示している。また、映像資料を見ると、ネガティブな発話をしている M10 や他の参加者は、笑顔であり、M9 に対して指をさすような動作や視線を合わせる様子が見られ、暗い雰囲気ではなかった。

例 21 のような発話は、表情なく発すると、聞き手や他の参加者が批判や非難と捉えられ、不快な感情になる危険性がある。笑いはこのような発話を和らげる働きを持つと考えられる。このことから、親しい関係の雑談の中でネガティブな内容の会話をする際に、話し手やその内容に同意する聞き手が笑いを発することは、会話を暗い雰囲気にしすぎない〈配慮〉であると考えられる。

## 第 9 章 視線における〈配慮〉の考察

## 第 1 節 視線の調査方法

まず各資料における参加者の座り方を 4 つの型に分けて図示する。



図 1 対面型

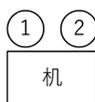


図 2 横並び型



図 3 対面+横並び型

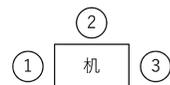


図 4 コの字型

この 4 種類の座り方に基づき、親しい関係の雑談の資料に見られた視線の特徴を〈配慮〉の観点から述べる。

会議・会合資料全てにおいて、参加者は主に目の前にある資料を見ているため、視線の動きが

限定されている。そのため、会議・会合資料との比較は行わない。

## 第2節 視線と〈配慮〉

まず1つ目の特徴として、基本的には参加者間で視線が合っている。

親しい関係の雑談の資料の中で最も視線が合いやすい座り方は、対面型である。対面型の資料は資料2、3、4である。その中で、資料3、4はよく視線が合っている。しかし、資料2は視線が合うことが少なく、映像資料から、参加者は2人とも画面外にあるテレビやメニュー、または自分の携帯電話を見ている。参加者が2人とも、視線を合わせることもよりも他のものを見ることを優先したことで、視線が合わなかったと考えられる。

参加者が3人の場合も基本的には視線が合っている。対面+横並び型の資料は資料6、8、9である。コの字型の資料は資料7、10である。対面+横並び型の場合、座席1か2と座席3に座っている参加者、コの字型の場合、座席1と座席3に座っている参加者の視線が合っている。例として、コの字型の資料7は座席1にM8が、座席3にM9が座っており、2人は向かい合っている。そのため、M8、M9は基本的に視線を合わせて会話している。

視線が合いやすい座り方では基本的に視線が合っていることから、視線を合わせることは、相手の話に興味があることを表し会話を盛り上げる、また、相手の表情を見ながら会話することで会話をスムーズに進める〈配慮〉である可能性がある。

2つ目の特徴として、視線が合いにくい座り方をしている参加者は、体や顔をそちらに向けようとするなどの行動によって、他の参加者の方向を向き視線を合わせようとしている。視線が合いにくい座り方として、横並び型や対面+横並び型の座席1と2、コの字型の座席2がある。

横並び型の資料は資料1、5である。対面型と比較して、横並び型の座り方は、参加者が机側を向くと視線が合いにくい。資料1は、会話冒頭部から終了部までゲームをしており、参加者はゲームの画面がある前を向いている。このような場合、参加者は基本的に視線が合っていない。しかし、M2はたびたびM1がいる方向を向き話しかける様子が見られる。参加者数が3人であり、かつ、参加者がコの字型に座っている資料7では、誰とも向き合っていない座席2のM10が話し手になった際、積極的に他の参加者の方向を向き、視線を合わせようとしていた。資料5は、椅子ごと相手に向けることで、体を相手の方に向け、視線を基本的に合わせていた。

対面+横並び型の座席1と2、コの字型の座席2に当てはまるのは、参加者が3人の資料5から10である。これらの資料では、聞き手が話し手の方向を、顔を動かすことで見ようとする行動が見られた。話し手は聞き手の2人を交互に見ることもあった。

視線が合いにくい状態でも、体や顔の方向を変えるなどによって相手と視線を合わせようとすることは、相手の話に興味があることを表し会話を盛り上げる、また、相手の表情を見ながら会話することで会話をスムーズに進める〈配慮〉である。

## 第3節 話題転換と視線

前節で述べたように、親しい関係の雑談では参加者は基本的に視線を合わせようとする。しかし、話し手が目の前の物事に言及した時、参加者間で視線が合わない場合がある。そのような場合、聞き手は言及された物事を見るが多かった。例を示す。

例 22 (資料 10：女性 3 人)

	タイトル	視線		
		F10	F11	F12
221	F12	みんなでかき回しちゃった。		
222	F12	(L あ)。		
223	F12	(L すいません)。		
224	F12	(L)		
225	F10	ふー。		
226	F11	うん。		
227	F12	(L)		
<hr/>				
228	F10	えっ。		
229	F10	(R すー)	ちゃん	それ
230	F10	それね。		
231	F12	ね：。		
232	F11	ね。		

視線	視線	視線
食事	食事	
F11 の ネイル	F10	F10
	F11 の指	F11 の指
	自分の指	

点線部より以前は、参加者が各々食事をしており視線が合っていない。つなぎの役割の発話である発話 228、229 と同時に F10 が、直後に F12 が視線を F11 のネイルに移す様子が見られる。発話 228、229 を受けた F11 は発話 232 「ね。」やその前後に視線を自分のネイルに移している。参加者間で一時的に視線は合わなくなっているが、話し手が視線の移動や発話によって話題転換を予告し、聞き手が視線を動かすことでそれを了承している。これらは話題転換をスムーズに進めるための〈配慮〉である。

以上のように視線が合っていない状態でも、参加者が同じ物事を見ることは、話題転換をスムーズに進めるための〈配慮〉である。

### 第 10 章 結論

本論文では、親しい関係の雑談における様々な言語表現、非言語行動を〈配慮〉の観点から考察した。

まず、本論文における〈配慮〉とは、親しい関係の雑談において、会話の参加者に対して友好的な態度を示すことで参加者に楽しく会話ができていると感じさせようとする、会話の参加者に踏み込みすぎないようにすることなどで会話をスムーズに進めようとする両方である。本論文では、〈配慮〉と考えられるものについて、「話題」「話者交替」「相づち」「相づち的表現」の 4 つの言語表現、「笑い」「視線」の 2 つの非言語行動から考察した。以下、各要素において本論文で指摘した〈配慮〉を確認する。

なお、〈配慮〉の定義に沿って、参加者に楽しく会話ができていると感じさせようとする〈配慮〉を【楽】、会話をスムーズに進めようとする〈配慮〉を【ス】、どちらにも当てはまる〈配慮〉を【楽・ス】と記すが、これらは明確に分類できるものではない。

第 4 章では話題に関して次のような〈配慮〉があることを指摘した。

1. 話題転換の際に沈黙したり相手の発話への割り込みをしたりしないこと【ス】
2. 話題転換の際に以前の話題と関係する話題を提示すること【楽・ス】
3. 食事やゲームをしながらの会話資料や目の前に何か物事がある際、それらに関係する話題を

提示し、次の話題に転換するまでの間を埋めること【楽・ス】

第5章では話者交替に関して次のような〈配慮〉があることを指摘した。

4. 確認要求のような、相手からの明確な返答を必要としていない、しかし、あえて相手の意思や判断を確認するような質問を、積極的に、頻繁にすること【楽】

第6章では相づちに関して次のような〈配慮〉があることを指摘した。

5. 相づちを積極的に、場合によっては他の参加者と同時に示すこと【楽】
6. 「繰り返し」の相づちを打つ際に内容や動作で同意的な態度を示すこと【楽】
7. 話題によって相づちの回数を変えること【ス】
8. 聞き手になった時に相づちをうち、聞き手の役割に沿った反応をすること【楽・ス】
9. 聞き手がその情報を知らなかったこと、また、「自分は理解したので話を進めてほしい」というサインを発する「あ。」を使用すること【楽・ス】
10. 「そう」やその繰り返しをターン冒頭に使用し、同意や共感を何度も表してから自分の意見を述べること【楽】
11. 「あー」や「はい」、その繰り返しをターン冒頭に使用し、まず話し手に「自分は話し手の話の内容を理解した」もしくは「話し手の話の内容に納得した」という信号を出し、それからターンを取り自分の話を始めることで、話し手が発話を遮られたように感じることを少なくすること【ス】

上の〈配慮〉には当てはまらないが、反対意見を述べる際に、「そう」やその繰り返し、「うーん」を使用することで、部分的な同意、共感や否定など、相手に予め自分の気持ちを示してから自分の意見を述べることは、参加者を不快にさせないようにするための〈配慮〉である。

第7章では笑いに関して次のような〈配慮〉があることを指摘した。

12. ポジティブな感情を表す笑いによって相手に応答すること【楽】
13. 冗談や、笑いを誘う発話の際に、話し手が率先して笑うことで、自分の発話が冗談や、笑いを誘う発話であること、笑ってほしいことを示すこと【楽・ス】
14. 冗談や、笑いを誘う発話の際に、聞き手が笑いを入れるべき場所を理解し、了承し、笑いを発すること【楽・ス】

上の〈配慮〉には当てはまらないが、ネガティブな発話や文句が現れている場面で、笑いを伴う発話をするのは、会話を暗い雰囲気にしすぎない〈配慮〉である。

第8章では視線に関して次のような〈配慮〉があることを指摘した。

15. 話題転換の際に、話し手が視線によって話題転換を予告し、聞き手が言及された物事や他の参加者と同じ物事を見ることで話題転換を了承すること【ス】
16. 場面に関わらず視線を合わせること【楽・ス】
17. 視線が合いにくい状態でも、体や首の方向を変えるなどによって相手と視線を合わせようとする【楽・ス】

本論文で指摘した中で特に注目すべき点は、「3. 食事やゲームをしながらの会話資料や目の前に何か物事がある際、それらに関係する話題を提示し、次の話題に転換するまでの間を埋めること」「13. 冗談や、笑いを誘う発話の際に、話し手が率先して笑うことで、自分の発話が冗談や、笑いを誘う発話であること、笑ってほしいことを示すこと」「14. 冗談や、笑いを誘う発話の際に、聞き手が笑いを入れるべき場所を理解し、了承し、笑いを発すること」の3つである。これは、雑談を研究対象にしたため見られた〈配慮〉であると言える。

「4. 確認要求のような、相手からの明確な返答を必要としていない、しかし、あえて相手の意思や判断を確認するような質問を、積極的に、頻繁にすること」のような、親しい関係の雑談を対象にしたために見られた〈配慮〉もあった。

さらに、従来の先行研究では重視されてこなかった疑似独話や相づち的表現に関する〈配慮〉も多数見られた。特に「10. 「そう」やその繰り返しをターン冒頭に使用し、同意や共感を何度も表してから自分の意見を述べること」は、親しい関係の雑談の相づち的表現の〈配慮〉と言える。

以上のように、親しい関係の雑談の中にも多くの場面で、人間関係の維持のための〈配慮〉が現れている。また、現れている〈配慮〉は言語表現、非言語行動とその組み合わせと多岐に渡る。

今後、親しい関係の雑談など、従来の配慮表現の研究では注目されてこなかった題材も対象に研究を進めていくことは、談話研究の発展や日本語教育への応用のためにも有益であると考えられる。

また、2017年から中学校において、2018年から高等学校において、新学習指導要領が実施されている。国語の授業では「話すこと」「聞くこと」やアクティブラーニングに重点を置くことが求められており、対話の重要性が認識されている。そのような中で、今後、国語教育にも、本論文のような談話研究の成果が応用できる可能性がある。

#### 付記

本稿は2023年度に神戸学院大学人間文化学研究所に提出した修士論文の主要部分に修正を加えたものである。また、査読者より、貴重なご意見、ご助言を賜った。記して感謝申し上げる。

#### 注

- 1) 以降、コーパスから引用した例は、通し番号の後に（資料番号：性別と参加者数）を記載する。
- 2) 確認要求については第5章第2節で詳しく述べる。
- 3) 相づちと相づち的表現の違いは第7章で述べる。
- 4) 相づち的表現については第7章で詳細を述べる。
- 5) ターン冒頭部以外に出現している相づち的表現については、郭（2003）と同じ結果であったため紙幅の関係上割愛するが、会議・会合には少なく親しい関係の雑談に多く見られた。

#### 参考文献

- Brown, P. & Levinson, C. L. (1987) *Politeness Some universals in language usage*  
 田中典子監修、齋藤早智子ほか訳 (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』 研究社
- Brown, G. & Yule, G (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, R. (2017) *Context Counts: Papers on Language, Gender, and Power*. Oxford: Oxford University Press. pp.41-46.
- Sacks, H., Schegloff, E. & Jefferson, G. (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation: *Language*. 50(4)
- Tannen, D. (1994) *Gender and Discourse*. Oxford: Oxford University Press. pp.22-47.
- 大浜のい子 (2000) 「日本語のターン交替と相づち」『広島大学教育学部紀要』2(49), 広島大学大学院教育学研究科, pp.153-161.

- 大浜るい子 (2002) 「相づち使用と対人関係」『広島大学日本語教育研究』12, 広島大学大学院教育研究科日本語教育講座, pp.1-9.
- 大津友美 (2004) 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ボライトネスー「遊び」としての対立行動に注目してー」『社会言語科学』6(2) 社会言語科学会, pp.44-53.
- 尾崎明人 (1996) 「会話教育のシラバス再考: 会話の展開と問題処理の技術を中心として」『名古屋大学日本語・日本文化論集』4, pp.119-135.
- 郭末任 (2003) 「自然談話に見られる相づちの表現ー機能的な観点から出現位置を再考した場合ー」日本語教育学会学会誌委員会 (編) 『日本語教育』118, pp.47-56.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2022) 『日本語日常会話コーパスー設計・構築・特徴ー』(国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書6)
- 国立国語研究所 (編) (2006) 『言語行動における配慮の諸相』くろしお出版
- 小宮千鶴子 (1986) 「相づち使用の実態ー出現傾向とその周辺ー」『語学教育研究論3』大東文化大学語学教育研究所, pp.43-62.
- 鈴木香子 (1995) 「内容区分調査による対話の「話段」設定の試み」『国文目白』34, 日本女子大学国語国文学会, pp.76-84.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「13 応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』くろしお出版, pp.257-279.
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003a) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003b) 『現代日本語文法7 第12部 談話 第13部 待遇表現』くろしお出版
- 野田春美 (2006) 「疑似独話が出現するとき」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新地平2 文論編』くろしお出版, pp.193-213.
- 野田春美 (2014) 「疑似独話と読み手意識」橋本行洋 (編) 『ひつじ研究叢書〈言語編〉第122巻 話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房, pp.57-74.
- 橋元良明 (1994) 「笑いのコミュニケーション」『月刊言語』23(12), 大修館書店, pp.42-48.
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』7 (13), 日本語教育学会, pp.59-65.
- 松田陽子 (1988) 「対話の日本語教育学ーあいづちに関連してー」『日本語学』7(13), 明治書院, pp.59-65.
- 水川喜文 (1993) 「自然言語におけるトピック転換と笑い」『ソシオロギス』17, ソシオロギス編集委員会, pp.79-91.
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』12(7), 明治書院, pp.4-11.
- 水谷信子 (1993) 「『共話』から『対話』へ」『日本語学』12(4), 明治書院, pp.4-10.
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー: 大学生会話の分析」『日本語教育』103, 日本語教育学会, pp.49-58.
- 三宅和子・野田尚史・生越直樹 (編) (2021) 『シリーズ社会言語学1 〈配慮〉はどのように示されるか』ひつじ書房
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, 表現学会, pp.101-111.